

「残された者の祝福」

ローマ 11:1-6

【1】反抗する民、イスラエル

ローマ書は9章から11章までの間にイスラエルの民の救いが語られている。11章には残された者たちがどういう者たちであるのか、またイスラエルの不信仰がどのようなものであるのかが記されている。

イスラエルとは、神の恵みを注がれた人々の見本である。決して彼らは信仰のお手本ではなかった。しかし、神の恵みが注がれた救いを見本であった。

10章の終わりのところでパウロはイザヤ書の引用をもってイスラエルに対する神の恵みについて語っている。不従順で反抗する民に対する神の恵みについてである。パウロの時代のイスラエルはまさにバビロン捕囚とされた時代と同じように神に対して反抗的であり、神から離れており、神の懲らしめを受けなければならないような状態にあった。しかし、神は反抗的で不従順な民に対してずっと手を差し伸べて、悔い改めるように招いておられたのである。

【2】エリヤの訴え

この神の約束の証拠としてパウロはエリヤの箇所を挙げている(1列王記19章)。エリヤの時代のイスラエルはその不信仰のゆえに間もなくアッシリヤによって囚われようとしている北イスラエル王国の時代である。神の取扱を受けるまさにそのような時であった。エリヤ自身ももはやイスラエルに望みはないと信じていた。

3節のエリヤの訴えは、神がイスラエルを裁いてくださるよにという訴えである。神はイスラエルにあわれみ

をしめし続けてくださり、預言者によって恵みのみことばを与えられた。それにもかかわらずイスラエルは彼らを殺し祭壇を破壊したのである。これは、みことばをないがしろにして、礼拝が妨害されている状況である。主イエスの時代のイスラエルも同様であった。エリヤは孤独な中、神のみことばを語り戦っていたのである。

【3】残された者たち

このような最悪な背教の時代においてさえ、神はご自分にある者たちを残されておられた(11:4)。「残された男子七千人」とは、大いなる民が残されているということである。しかし、彼らは決してエリヤのような目立つ者ではなかった。そのような弱くて未熟な者たちであったかもしれないが、彼らは主があわれみをもって残しておられた民である。

【4】恵みの選び

「残された者」とは、神の真実を明らかにする者たちである。彼らはただ恵みによって選ばれた者たちであって、彼ら自身の行いや徳によったのではなかった。神の選びは恵みである。このような恵みをパウロ自身がまさに経験していたのである(11:1)。この感謝をもってパウロは6節を語るのである。

「今この時も・・・」(11:5)神は恵みの選びによって残してくださる者がいるのである。私たちが今、この日本という国でクリスチャンであることの意味は何であろうか。自分自身になされた神の恵みの選びのわざを考えなくてはならない。残された者として、自覚と感謝があるか。救いは100%神の賜物として与えられるのである。だから神の恵みの選びにより頼むのだ。